

報告2

秦漢櫟陽城の考古学的発見と研究(国際シンポジウム 中国都城考古学の最前線3 ——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展 ——)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 劉, 瑞, 趙, 君儒, 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000309 |

報告2 秦漢櫟陽城の考古学的発見と研究

劉 瑞（中国社会科学院考古研究所・研究員）

はじめに

櫟陽城遺跡は、現在の西安市閻良区新興街道・武屯街道一帯に位置している。城跡の地形は平坦で、川と水路が縦横に通っており、各種の遺構はすべて地下に埋没していて、地上には何も残存していない。『史記・秦本紀』に記載するところでは、秦献公二年（前383年）に「櫟陽に城く」、秦は雍から櫟陽に遷都した。秦献公、秦孝公は櫟陽を都とし、「商鞅の変法」など一連の改革を実施し、「隣国を傾けて諸侯に雄たり」という成果を収めた。秦孝公十二年（前350年）には「咸陽城を建設して、冀闕を築き、秦は咸陽に遷都」した。したがって、櫟陽は34年間秦の都であった。

秦末の楚漢戦争の際に、項羽は関中を三分し、司馬欣を塞王に封じて、「王は咸陽より以東、黄河に至るまで櫟陽を都とす」（『史記』「項羽本義」）。後世のいわゆる「三秦」の1つである。6カ月後、劉邦は「表向きは栈道を修築するという理由で、裏では陳倉を渡り」関中に帰還し、櫟陽を漢王の都とし、項羽と一連の戦いを開始した。漢を建国した後、初めに洛陽を都にしようと考えたが、婁敬と張良から関中がよいとの意見を受けて関中に戻り、櫟陽を都とし、のちに長安に遷都した。つまり櫟陽は漢王朝最初の首都であったのである。

1. 考古学的発見

秦都櫟陽の調査は、1930年代に西京準備委員会の陳子怡氏から始まった。彼は『漢櫟陽考』のなかで、「秦漢櫟陽は、今の櫟陽東北二十五里、今の武家屯（すなわち広陽鎮）である。……今の武家屯の北約四、五里には、また古城屯があり、また古城が県の北にある、とっているのがこれである。ただ、今は城跡はすでに無く、人々はすでにこれが古城屯であるとは理解しておらず、しかも古爾屯という別名で呼んでいるが、行政上はまだ古城屯と呼ばれている。この城跡こそは秦漢の旧都であり、古城屯はその城跡の北部に、広陽鎮はその南辺に当たるのである¹⁾。」と判断しているが、その後それ以上の調査が実施されることはなかった。

1963年に、陝西省臨潼県武屯公社関庄生産隊の村民たちが、金餅8枚の入った1点の銅釜を発見し、また近くからは雲文軒丸瓦などの建築材料が出土した。そこで、すぐに陝西省文物管理委員会が人を派遣して現地調査を行い、ここが秦都櫟陽の可能性があると判断した²⁾。

1964年に、陝西省文物管理委員会は田醒農、雒忠如氏などを派遣し、銅釜と金餅の発見地で15日間の考古学的調査を行い、櫟陽城は「東西1801m、南北2232m」の城跡であることを確認した。しかし、当時は「今回の調査は、時間がなかったこともあり、発見されたさまざまな現象を一般的かつ初歩的に紹介したに過ぎず、多くの問題についての明確な結論は、さらなる調査を経てはじめて確実なものを出すことができるのである。そのため、今後は調査チームを再編成し、研究用の遺物をより多く得るために、全面的な調査を行う予定である。」と明確に表明している（図1）³⁾。

1980-1981年に、劉慶柱氏と李毓芳氏が率いた中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊は、4シーズンに渡って櫟陽城遺跡に対してボーリング調査と試掘を行い、櫟陽城遺跡の南城壁、西城壁そして3ヶ所の門の遺跡を特定し、秦漢時代の道路跡13条、建物跡、住居跡、手工業工場など15ヶ所を発見した。また南門の遺構を発掘し、城壁、道路、そして一部の建物跡で重点的に試掘調査を行い、櫟陽城の北西、南東、北東部にある墓地の分布と年代を明らかにした。同時に櫟陽城北西にある漢太上皇陵と昭靈皇后墓を探索し、櫟陽城南東において戦国末期から後漢までの墓の一部を発掘した（図2）。ただし、「地表に出ている遺構はなく、遺物も多くない。文化的な遺構と遺物は主に地表下1.5-2mの場所にある。近年、城跡付近の地下水位が上昇し、地表下1-1.5mで泥状になり、ボーリング調査と発掘作業をきわめて困難にしていた」ために、北城壁と東城壁をいまだ確認することができなかった。この時の調査によって、「櫟陽故城

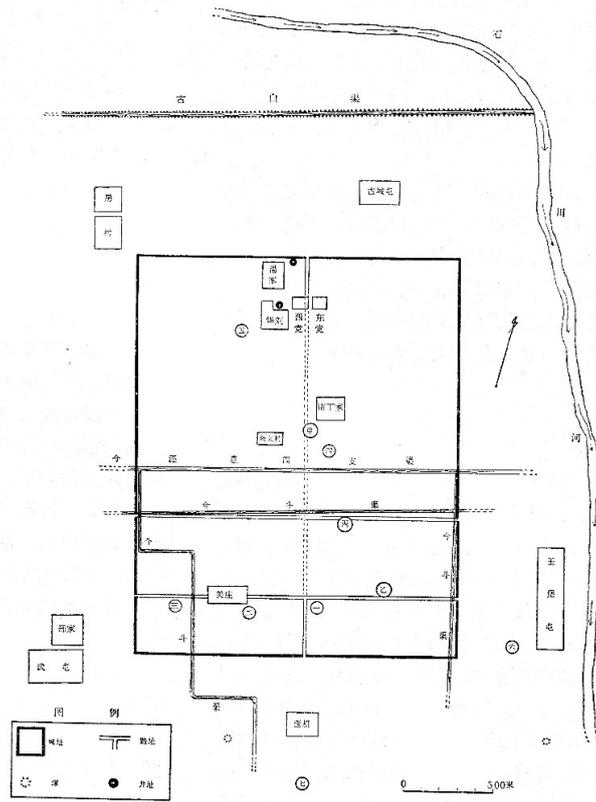
は東西長2500m、南北幅1600mの長方形の城址であることが確認され、これは『長安志』巻十七櫟陽県条に記載された「東西五里、南北三里」という概数と一致する⁴⁾。]

2000年に、秦漢櫟陽城は國務院により第六次全国重点文物保護單位に指定された。

2012年、西安市文物局と閻良区政府は、閻良区の發展計畫を策定するにあたって依拠すべき資料を提供するために、そして櫟陽城遺跡保護計畫策定に科学的な根拠を得るために、櫟陽城遺跡の考古学的事業を再開することを協議した。この事業を担当したのは、中国社会科学院考古研究所の劉瑞、李毓芳氏と西安市文物保護考古研究院（2013-2014年は王自力氏、2013年は柴怡氏、2014年は寧琰氏、2015年から現在までは張博宇、高博氏が責任者）が共同で組織した阿房宮・上林苑考古隊である。一連の準備を経て、2013年4月、櫟陽城の考古学的事業は再開された。

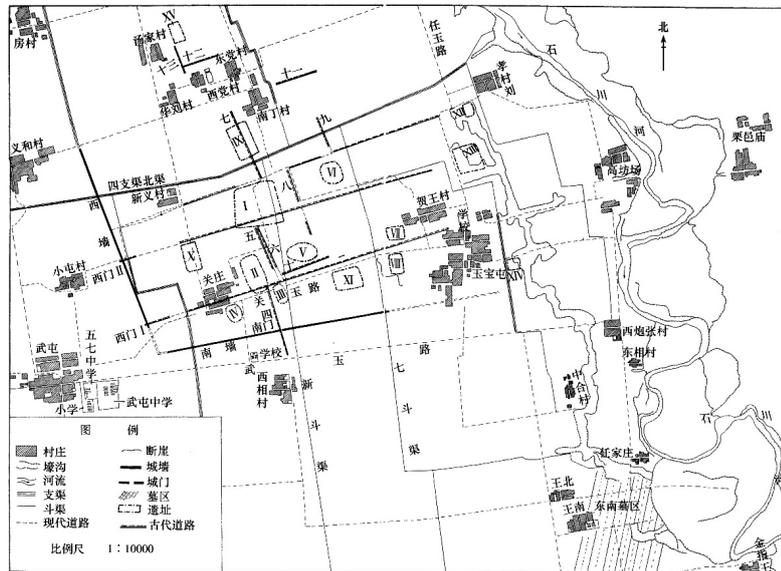
2013年から2014年にかけて、考古隊は主に1980年から1981年にボーリング調査を行った南城壁と西城壁の再調査を行い、一部の地区で北壁を発見し、この城跡に「一号古城」という整理番号を付けた。ボーリング調査によると、南北は2430mであり、東城壁は発見できなかった。また、一号古城の東城壁を探索していた時に、遺跡北東の御宝屯一帯で、東西に延びる城壁の基礎を発見した。この城壁の基礎は、東は石川河まで伸びて北上してすぐに石川河に分断されるが、西へも延びており、

ボーリング調査によってこの城壁基礎の長さは東西約3100mあることがわかった。その後、この東西城壁の西端で南北に延びる城壁の基礎を発見し、それは北へ向かって石川河の南岸に到って分断されており、ボーリング調査によると、この城壁基礎の長さは南北約3800mである。この城壁で囲まれた城跡を「二号古城」という番号とした。この城壁の断ち割り発掘中に、城壁下の基礎から五銖銭が出土したため、こ



1964年栎陽遺址復原示意图（《文物》1966年第1期，P12）

図1 1964年栎陽城遺跡の復原模式図



1980-1981年勘探栎陽城遺址平面图（《考古学报》1985年第3期，P356-357）

図2 1980-1981年栎陽城遺跡ボーリング調査地点の平面图

れによって二号古城の上限年代は武帝の元狩二年（紀元前118年）より古くはないと判断した。また、城壁の南側を発掘中に、城壁南環城道路が新莽時代の墓葬によって破壊されていることが発見された。このことは、この城跡の廃棄時期がおよそ前漢末新莽時期であったことを示している。

二号古城の西城壁をボーリング調査中に、二号古城の西約1500mの場所で版築の遺構が発見されたが、これは二号古城とは別の城跡であり、そこでこの城跡は「三号古城」という番号とされた。

これらの城跡の時代と性格を明らかにするために、発見された遺跡に対して試掘を行い、出土した有文磚、葵文軒丸瓦、動物文軒丸瓦、雲文軒丸瓦、無文軒丸瓦などの建築材料やコの字形平瓦の破片などの発見から、この版築遺構の時代上限は戦国中期で、前漢早期にはすでに廃墟となっていたことが判明した。

その後、考古隊は周辺で一連のボーリング調査を行った。その結果、東西105m、南北約100mの正方形に近い院落が発見された。その敷地の東側、北側、西側には幅約10mの回廊があり、北側の中央には幅約5.6mの出入口が、南側の中央には幅約7.3mの出入口があり、左右には長さ約14mの正方形に近い版築基壇があり、外に向かって2mほどの壁を通過して回廊と繋がっていた。敷地の中には建物遺構は見つからなかったが、敷地の北門から260mのところまで4つの版築建物遺構が発見された。

この一地域に3つの城跡が密集して分布していることから、櫟陽城跡の残存の分布を正確に把握するために、考古隊は3つの城跡を中心に広域にわたってボーリング調査を行った。その結果、次のようなことが確認された。櫟陽城跡は東は石川河を渡って、現在の石川河の東にまで及んでいて、その端は二号古城の南東隅まで約1700mである。南は武屯街道の任家村、王北村、任趙村、三合村、耿東村、耿西村一帯までであり、その端は一号古城の南城壁まで約1500mである。西はおおむね武屯街道の耿西村、新興街道の槐樹村、仁和村、屈家村、張大夫村、官路村一帯までであり、そこから北へ向かって石川河にまで到っており、その端は一号古城の西城壁まで約2600mほどである。北側の城壁はおおむね康橋鎮の槐園、菩薩坡一帯まで、その端は二号古城の北城壁まで約1000mほどである。石川河による分断で、遺跡は石川河の西、東、北の3つの区域に分けることができ、合計面積は約36.51km²である。

こうして、2013年から2014年にかけての考古学的ボーリング調査と試掘を経て、櫟陽城遺跡の四辺の範囲がほぼ確定された。そして、三号古城内の遺構に対する発掘調査によって、その建築年代の上限は戦国中期までで、前漢時代にはすでに破壊されて存在していなかったことが明らかである。したがって、その上限時期は、文献に記載された秦が櫟陽に遷都した時期と基本的に一致している。

三号古城から出土した動物文軒丸瓦とコの字形平瓦は、鳳翔の秦雍城遺跡から出土した同様の遺物と形態と作りが似ているだけでなく、時代も近い。その他の関連する発見とあわせると、三号古城は戦国時代の秦の櫟陽域の所在地のはずである。この城跡は、前漢時代まで続いていることから、前漢初期の櫟陽でもあったはずである⁵⁾。

三号古城の年代を確定した後、考古学的な調査は三号古城に集中することになった。2017年にボーリング調査で北城壁と西城壁を発見したが、野菜栽培の温室が存在していたために、南と東の城壁は未だ発見されていない。三号古城の北城壁以南、西城壁以東のボーリング調査区域内から、南から北へ向かって一～四号建物と番号が付けられた4つの大型版築基壇が発見された。そのうち一号建物はもっとも南側でもっとも大きく、東西長67.5mである。一号建物の

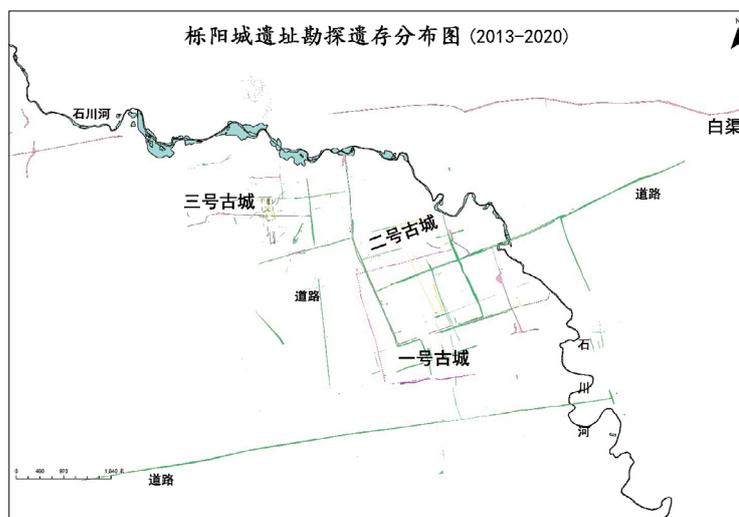


図3 櫟陽城遺跡ボーリング調査検出遺構の分布図

北約18mが2号建物で、東西長41mであり、その東は回廊などを通じて一号建築と繋がっている。発掘調査によると、一号建物の南北幅は22.3mで、二号建物の南北幅は11m、残高は0.5から0.8mで、基壇の外側壁面の一部に漆喰が残存していた。二号建物の北18mに三号建物があり、その東西長は56.6mで、南は回廊を通じて二号建物と繋がっている。三号建物の北30.5mに四号建物があり、その東西長は34.5mで、南北幅は約10mである。四号建物の西側4.7mで五号建物が発見され、その東西長は23.5mで、南北幅は13.5mである（図4）。

三号古城の南部区域をボーリング調査する過程において、大型院落の南約170mの場所の東西520m、南北410mの範囲内に、比較的連続して続く赤く焼けた土と瓦礫の分布域が発見された。さらにボーリング調査を進めると、この範囲の中部に南北に走る4条の、幅約3～4mの溝状堆積物が存在し、それによってこの範囲がある程度区切られていることが判明した。2016年、2017年の試掘を経て、ここは手工業生産区であることが暫定的に確定されている。

三号建物の版築基基壇に対する試掘で、半地下式建物が精査、確認された。4号建物の発掘調査では、浴室と壁炉の遺構が発見され、四号建物では浴室と浴室床の排水口につながるパイプやマンホールなどの排水施設が発見された。発掘調査の結果、これらの遺構は同時期に建設され、廃棄されたのも同時であったはずである。

三号古城の発掘調査では、内面には麻点文（編布の一種）、外面には細かな縄叩き目や中程度・粗い縄叩き目が施された丸瓦、平瓦、コの字形平瓦、無文軒丸瓦、動物文軒丸瓦、雲文軒丸瓦などの建築材料が出土した。そのなかには、復原された長さ73cm、直径63cmの大型丸瓦も出土しており、これは中国考古学史上最大の丸瓦となっている。同時に、遼寧省碣石宮遺跡のB型の大型半円形軒丸瓦（半瓦当）と文様がかなり近い軒丸瓦の破片（裏表紙）なども多数出土している。

出土した建築材料から、三号古城は雍城を継承し、前漢初期まで続いたことがわかる。

三号古城の発掘調査で出土した半地下式建物、空心磚を敷き詰めた通路、大型丸瓦、軒丸瓦、浴室、壁炉などの遺構からみると、当該の建物跡は秦の高級宮廷建物にふさわしい。

文献や出土遺物から、三号古城の上限は戦国時代中期であり、戦国時代の秦の献公と孝公が櫟陽に都を定めた時期とちょうど重なる。つまり秦の都・櫟陽であったのである。それは前漢初期まで利用されていたので、塞王司馬欣の都でもあったであろう。櫟陽の考古学的調査から見て、三号古城で発見された半地下式建物、浴室、壁炉などの施設、空心磚の通路、巨大な丸瓦、軒丸瓦などの遺物は、これまでの秦の考古学的調査では年代の最も早いものであり、秦と漢の建築制度の多くが櫟陽城そのそれらから始まっていたことがわかる⁶⁾。

2018年4月に、櫟陽城遺跡は「2017年の中国十大考古新発見」に選ばれ、7月に閻良区政府は、三号古城の中核区域の95畝（×660㎡）を集中管理し、さらなる考古学的作業に有利な条件を提供した。これを機に、櫟陽城跡三号古城の中核区域での考古学的作業が本格的に始まったのである。

2018年から2020年にかけて、考古隊は、先に発掘された四号建物を中心に、全体的な発掘を実施して、四号建物から十号建物までの番号を整理した。ボーリング調査資料から見ると、発掘区は三号古城の北城壁にきわめて近いところであり、遺構の整理状況から、六号建物の北側に位置する東西に延びる壁の基礎が、三号古城の中で区画上重要な意義をもっているはずであり、今回の発掘調査で確定できた一連の大型建物は皆この壁



2018-2020年櫟陽城遺址三号古城清理遺存（由南向北）

図4 2018-2020年櫟陽城三号古城の精査遺構（南から北）

の南に集中するが、その北側は建物が非常に「まばら」であることがわかった。発掘資料によると、四号建物は東西長24.25～33.45m、南北幅が8.6～14m、残高が0.9m、五号建物は南北長10.2m、東西幅8.2m、残高0.67m、六号建物は東西長11.35m、南北幅8.25m、残高0.28m、七号建物は東西長13.8m、南北幅7.8m、残高0.48m、八号建物は東西長11.2m、南北幅7.8m、残高0.48m、九号建物は南北長34m、東西幅8.1～10.7m、残高0.52mである。十号建物は南側に向かって伸びており、ボーリング調査の結果、三号建物と繋がっていることが分かった。2018年から2020年にかけての考古学的発掘調査で、はじめて実施された大面積の発掘を基礎に、戦国から秦漢時代の宮城区域内の「後宮」区が精査、発見された(図5)。

2021年から2022年にかけて、四号建物の南で三号建物と十一号建物の精査が完了して、櫟陽城跡に南北方向の軸線が存在することがおおむね確定された。これは古代都城の配置で初めて発見された軸線である。

2. 櫟陽城の研究

櫟陽の考古学的研究の発展過程から見ると、調査はすでに1930年代に始まったが、当時の判断は主に文献の記載と限られた野外調査に基づいており、史語所が安陽殷墟で、北平研究院が関中で行った考古学的調査と同様に、系統的な地表調査、ボーリング調査と発掘は行われなかった。

1964年に陝西省文物管理委員会が行った考古学的調査は、1963年に武屯関庄で8点の金餅が出土した後に行われた調査をそのままの継続したものであった。その際に、まず関連区域の大面積調査を展開して、櫟陽城跡に対して真の意味での本格的な考古学的調査を初めて実施し、櫟陽城跡の初めての復元図を描き出したのである。フィールドワークを終えた調査員たちは、すぐに最初の櫟陽城遺跡の考古学的略報を執筆し、その時櫟陽城で発見された版築、道路、遺跡、水路、墓などの遺構を詳細に報告した。しかし、残念ながら作業はわずか15日間であり、調査員自身が言っているように、彼らはいくまで初步的な判断をしえたと過ぎず、その後「調査隊を再編成し、現場を全面的に調査する」という計画はあったが、実行に移されることはなかった。

その後の1980～1981年の考古学調査の結果から、1964年の調査で見つかった城壁についての判断は正確ではなかったことがわかったが、ただその時に見つかった一部の道路や遺構の痕跡は、その後の考古学的調査によって実証されることになった。

現在から振り返ってみると、当時の城壁についての判断に誤りがあった原因は、櫟陽の版築方法の特殊性によるものと思われる。「ここの版築は、地形は平坦でどこでも断面が少なく、また版築の工具である石の頭部・底面部は磨かれておらず、ここから秦の統一以降の時代によく見られる堅固ではっきりした夯層の版築とは明らかに異なっていることがわかり、しかも土質は柔らかく夯層が無いという状態である。しかも、そのほとんどは掘込地業の溝を掘らずに地面から直接積み上げられたものなので、版築土はほとんど残っておらず、たまに残っているものがあったとしても識別が難しく、その色や密度を自然の土・攪乱土などと比較して、判断するしかないのである。」もちろん、調査作業の時間が短く、「識別が難しい」状況下では、発掘して検証することがまだできず、判断を誤らせた重要な原因となったに違いない。

1980年4月から1981年12月にかけて、中国社会科学院考古研究所の劉慶柱氏と李毓芳氏が組織した櫟陽発掘隊は、櫟陽で2年間の考古学的調査を実施した。人員構成のうち、劉慶柱氏と李毓芳氏は北京大学考古学専攻の卒業で、長期にわたって咸陽での秦漢考古学に従事し、秦咸陽宮遺跡など一連の重要な考古学的作業に参加してきた。周知のように1980年代前半までは、さまざまな事情から秦漢時代の遺跡の考古学的調査は全国的に少なかった。そのなかにあって秦咸陽宮遺跡など咸陽の秦漢時代遺跡の発掘調査に系統的に参加していた二人は、櫟陽の考古学調査を始めた時点で秦漢時代の遺跡や遺物について「十分な知識と知見の蓄積をもっていた。だからこそ、働き盛りの二人は、わずか2年弱の間に、櫟陽城遺跡の調査や周辺の墓の発掘を計画的に行い、実りある成果を上げることができたのである。

しかし、1980～1981年の考古学的調査当時は地下水位が相当高かったため、当時のあらゆる遺物が水

位下にあり、加えて櫟陽の「版築土は緩く、層状を見分けることができず、しかも、掘込地業の溝を掘らずに攪乱土の上に直接積み上げられていた」ことから、考古学的な「ボーリング調査と発掘作業に非常に大きな困難を生じさせた。」水位が低い場所で部分的に試掘を行ったものの、結局は地下水位に阻まれ、北城壁と東城壁が見つからないままに、その調査は中断を余儀なくされたのである。

ただまことに幸運なことに、発掘調査から20年後の2000年、その時の考古学的資料に基づいて、県級の文物保護単位だった秦漢櫟陽城遺跡は一躍、国務院から国家重点文物保護単位に認定された。この「飛び級昇格」は、一方で遺跡そのものの重要性を示しているとともに、他方で、国家文物局や学界が今回の考古学的調査の成果を全面的に認めたことを意味する。

櫟陽遺跡の保護をさらに強化するため、2013年から改めて櫟陽遺跡の考古学的調査が再開された。地下水位が絶え間なく下がり続けたため、ボーリング調査によって多くの地下の埋蔵遺構がスムーズに確認され、2013年から2015年の2年間というさほど長くない期間に、考古隊は既存の手がかりから前後して3つの古城を確認し、この地域の地下遺跡の分布の全体像を大きく豊かなものにすることができた。

三号古城のボーリング調査と発掘調査では、等級の高い版築建物跡が集中的に分布していることが発見されただけでなく、長年雍城遺跡の特徴とされてきた動物文軒丸瓦やコの字形平瓦など、過去2回の発掘調査では発見できなかった建築材料が出土し、雍城遺跡と櫟陽城遺跡を時代的に結びつけ、三号古城が戦国中期以降の遺跡であることが明らかにされたのである。さらなる発掘と整理の結果、三号古城は前漢の時代に廃棄されており、この間に秦献公と孝公の櫟陽遷都や司馬欣の冀都などのできごとが行われていたのである。したがって、各種の糸口を結びつけて総合的に判断すると、三号古城は戦国中期から前漢時代の櫟陽であったに違いない。

おわりに — 櫟陽城考古学の課題と展望 —

櫟陽の考古学は、この9年間で重要な成果を次々と上げてきたが、ただ歴年のボーリング調査の状況から見れば、それはやはり既存の手がかりに対する追跡的な探索であった。したがって、一号古城と二号古城では未だ多くの範囲がボーリング調査されておらず、また二号・三号古城間の範囲もボーリング調査されていないため、城内の遺構配置は未だ明らかになっていない。したがって、現在では様々な証拠から三号古城は戦国中期から前漢時代にかけて櫟陽に所在したとされているが、ただ事実としては、1980-1981年の一号古城の南門発掘調査においても、また二号古城内の南亭村南の発掘調査現場においても、コの字形平瓦の破片が出土あるいは採集されている。つまり、一号古城と二号古城にも早期の等級の高い遺物が存在していたのであり、当時これらの区域内にはある程度大型建物が存在していたはずである。とすれば、三号古城以外の一号・二号古城内にも、あるいは四号古城とか五号古城が存在した可能性は排除できない。当然、三号古城の南側や二号古城の西側というさらに広い空間は、これ以上のボーリング調査に限界があるので、他の戦国中期の建物が存在する可能性も否定できないのである。

櫟陽は秦人の「九都八遷」中の重要な都城であり、そこに「畦時」を設置したという記録は、秦の他の都城には見られないものであり、咸陽ですらそのような記事は見当たらない。文献記載によると、後世の人が畦時は「故城中」に記述しているが、三号古城に畦時があったという手がかりは今のところまったくない。さらに、三号古城が前漢の初期に廃棄されたことを考えると、後世の人がいう「故城」というのは実は二号古城のことである可能性もある。したがって、二号古城での畦時の有無の探索は、今後の櫟陽城考古学において重要な仕事になると思われる。もちろん、古代の畦時が発見された西県や雍城の場合は、それは城外の高台に位置していたので、櫟陽の場合も、より広範囲な探索が必ず必要となろう。

秦献公は櫟陽で没したと記録されており、王は都城の近隣に葬られるという「慣例」に従えば、櫟陽には献公の墓があったはずである。また、劉邦は「故の塞王欣の頭を櫟陽の市で梟（さら）した」と記録されており、櫟陽には「市」も存在していたはずである。したがって、櫟陽における陵墓と市の位置は、ともに不断の探査が必要となる。

1980年から1981年の調査期間中に実施された櫟陽周辺の墓に対する調査、ボーリング調査、発掘によ

り、漢の太上皇帝の陵墓を含む、まとまった重要な資料が得られた。2013年の櫟陽城考古学の再開からすでに7年経ったが、地下水位の低下によってもたらされた遺跡・遺物埋蔵範囲の空前の拡大や三号古城の発見によって、考古隊は2015年から作業を三号古城に集中させることになった。しかし、そこで本来予定していた周辺墓葬区の考古学的作業ははまだ展開されない状況にある。今のところ、櫟陽に埋葬された可能性がある秦献公の陵墓についての明確な手がかりがないだけでなく、戦国時代中期から後漢までの櫟陽城付近の墓葬区についても見るべき手がかりがない。これは同様に櫟陽城の考古学において解決しなければならない問題なのである。

三号古城の南側で手工業区の分布範囲がほぼ確定されたが、考古学的調査はまだまだ不十分で、文献と出土陶文にしばしば見えている「櫟市」が未だ発見されていないだけでなく、青銅器銘文に見られる「櫟陽工」の青銅器生産拠点の位置もまだ確定していないので、今後の不断の探索が必要である⁷⁾。

注

- 1) 陳子怡「漢櫟陽考」『西京訪古叢稿』西京籌備委員会、1935年版。
- 2) 朱捷元・黒光「陝西省興平縣念流寨和臨潼縣武家屯出土古代金餅」『文物』1964年第7期。
- 3) 陝西省文物管理委員会「秦都櫟陽遺址初歩勘探記」『文物』1966年第1期。
- 4) 中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊「秦漢櫟陽城遺址の勘探与試掘」『考古学報』1985年第3期。
- 5) 阿房宮与上林苑考古隊「西安秦漢櫟陽城考古新進展－確定戦国櫟陽城位置并發現漢唐白渠－」『中国文物報』2015年9月11日。
- 6) 劉瑞・李毓芳・張翔宇・高博「西安閻良秦漢櫟陽城遺址」『2017年中国重要考古發現』文物出版社、2018年版。同「陝西西安秦漢櫟陽城遺址考古取得重要收穫－發現三座古城、確定三号古城遺址為秦漢櫟陽所在－」『中国文物報』2018年2月23日。
- 7) 本文は、劉瑞『櫟陽考古發現与研究』の「前言」を基礎として、新発見に基づいて一部修正・加筆したものである。原著は、中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護考古研究院『櫟陽考古發現与研究』科学出版社、2020年9月版。

翻訳：趙 君儒（東北大学文学研究所・大学院生M2）、補訂：佐川 正敏（東北学院大学・教授）